

最も印象深かったのは、ダカール郊外のヌゴールホテルからの体験である。

このホテルは、東京上野の東京文化会館の設計者でもあるフランスの建築家ルイ・コルビジェ氏が設計した〇階建ての本館とバンガロー形式の建物とがある。

(※記録していなかったので、正確な階数は覚えていない)

宿泊したのは前者であるが、おそらく、宿泊を手配したルフトハンザ航空は、バンガローに我々を個々に宿泊させるのは、旅に不慣れな日本人にはバンガローは不向きであるとの判断をしたのか、それとも、セネガルという国の治安を考えて避けたのかの、どちらかであろう。私は前者であるように思えた。

後年、南太平洋のタヒチ島などのツアーが多く組まれ、海に突き出たバンガローが日本人観光客が宿泊する機会が増えていったが、今回の旅行はまだそのようなブームより遙か前の旅行であり、団員からも強い希望は出てこなかった。

もっとも、その前日に宿泊したアビジャンのホテルでは、上階にある部屋にも拘わらず、バルコニーへの扉は就寝時には閉めておくようにとの貼り紙で宿泊者の注意を喚起していたほどであったのだから。

本館は、廊下の両側に部屋が並ぶのは通常のホテルと同様であるが、廊下が上の階と下の階との中間にある特異な設計であった。すなわち、下の階の部屋へは階段で1フロアの半分ほど下がった所に入口があり、また、上の階の部屋へは階段で1フロアの半分ほど上がった所に入口がある。

部屋は天井が高く、ベッドには蚊帳のような白い布が上から垂れ下がっており、優雅な感じすら抱いたものの、出発便の関係で真夜中に出発しなければならない半泊ため、寝過ごすことの許されない添乗員としては、一生懸命下着の洗濯に時間を費やすことしかできなかった。

その代わり、それに先立つ薄暗くなった夕方、素晴らしい体験をすることができた。ホテルの裏で海岸が大きく湾曲し、正面に伸びた砂浜海岸の彼方に小さく見える部落があり、お祭りだったのか、結婚祝いだったのか、単調なボンゴ(?)の響きとともに、人々の歌声が風に乗ってこちらに流れてくる中を、悠々迫らぬ大日輪が、椰子の木をシリエットに浮かび上がらせながら、大西洋の遙か彼方に沈まんとする光景は、カメラを持たずに椅子にすわったままの私に、かなりの間、巧まぬ一大交響詩を奏でてくれたのであった。

ハワイの、マニラの落日の美しさは知らないが、私の脳裏にこびりついたまま、その深夜（午前3時）、次の目的地リオ・デ・ジャネイロに向かったのであった。